

# 史跡院庄館跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第7集

1981

津山市教育委員会

## 序

院庄館跡は鎌倉時代から室町時代にかけての美作守護職の居館と推定されている遺跡であります。また、『太平記』にみられる後醍醐天皇と児島高徳の伝承の地としても広く世に知られているところもあります。

近年、交通機関の発達などにより、来訪者が急激に増えつつあります。さらに、館跡付近には工場の進出、宅地化の波がおしよせ、市としても積極的に史跡公園として整備する必要にせまられてきました。このため、史跡公園として整備するための基礎資料を得るべく館内の発掘調査を昭和48年11月から昭和49年3月にかけて実施いたしました。この結果、遺構の保存状態は良好で、井戸跡、建物の柱穴などが検出され、大きな成果を得ることができました。また、周辺の水田には「御館」「掘り」などの館関連地名も残っており、館城はさらに周囲へ拡がることが予測されたことも大きな収穫がありました。

今回の調査はこれらの事実をふまえ、館城の確認を目的として実施したものであります。調査は冬の寒い時期ではありましたが、関係各位のご協力により無事調査を終了することができましたので、ここに調査の結果を報告いたします。各位のご活用をお願いします。

最後に、調査にあたって指導、助言をいただいた関係各位、また、調査に理解と協力を惜しまれなかった地権者各位に対し厚くお礼申し上げる次第であります。

昭和56年3月31日

津山市教育委員会

教育長 福島祐一

## 例　　言

1. 本書は津山市教育委員会が、国・県の補助金を得て実施した院庄館跡発掘調査の報告書である。
1. 発掘調査は昭和55年11月17日から昭和56年1月8日まで実施した。
1. 本書の執筆は社会教育課行田裕美が行なった。
1. 本書の作成にあたっては、安原啓示、河本　清、三好基之、神尾　齊、小谷善守氏の指導・助言を得た。とくに、三好基之、神尾　齊氏には文献の提供、解説など懇切なる指導・助言を得た。また、調査補助員光延船造の協力を得た。
1. 本書に用いたレベル高は海拔高である。また、方位は磁北である。
1. 本書第2図に使用した「院庄館跡と関連遺跡分布図」は、建設省国土地理院発行5万分の1地形図（津山西部）を複製したものである。

## 目 次

I	立地と周辺の遺跡	1
II	院庄館跡	4
III	調査の経過	6
	1 調査に至る経過	6
	2 調査体制	7
	3 発掘調査経過	8
IV	調査の記録	9
V	遺 物	13
VI	結 語	16

## 挿 図

第1図	院庄館跡位置図	1	第10図	T-4 平面図及び断面図	11
第2図	院庄館跡と関連遺跡分布図	2	第11図	T-5 南半分平面図及び断面図	11
第3図	院庄館跡周辺地形図	3	第12図	T-6 平面図及び断面図	12
第4図	院庄館跡立地状況	4	第13図	T-7 平面図及び断面図	12
第5図	館関連地名図	5	第14図	T-8 平面図及び断面図	13
第6図	T-1 平面図及び断面図	9	第15図	T-5 出土鉄製品実測図	13
第7図	T-2 平面図及び断面図	10	第16図	出土土器実測図(1)	14
第8図	T-3 平面図及び断面図	10	第17図	出土土器実測図(2)	15
第9図	トレンチ配置図と地形図	折り込み			

## 図 版

図版 1	院庄館跡航空写真	図版 5-2	T-5 柱穴（東から）
図版 2-1	T-1, T-2 (東から)	図版 6-1	T-6 (西から)
2	T-2溝（南から）	2	T-7 (西から)
図版 3-1	T-2溝（西から）	図版 7-1	T-8 (南から)
2	T-2溝断面（南から）	2	T-8溝断面（北から）
3	T-2溝断面（北から）	図版 8-1	土鏡、土師質土器
図版 4-1	T-3 (東から)	2	勝間田焼
2	T-3溝（南から）	図版 9-1	備前焼、白磁、(外面) 鉄製品
図版 5-1	T-4, T-5 (北から)	2	備前焼、白磁、(内面) 鉄製品

## I 立地と周辺の遺跡

美作国は古くから山陰と山陽を結ぶ要衝にある。山陰へは四十曲峠を越えて出雲・伯耆国へ、人形峠を越えて伯耆国へ、黒尾峠を越えて因幡国へと達する。山陽へは旭川沿いに、あるいは落合から備中川沿いに南下して備前国へ、吉井川沿いに南下して備前国へと至り、吉備中枢部につながる。また、津山から佐良山を経由し福渡へ出るルートも見逃すことのできない交通路である。東は杉坂峠を越えて播磨国へ達する。現在も主要交通路として利用されており、その任は多大なものである。美作国のほぼ中央部に津山市が位置する。津山市の西端は吉井川によって久米町との行政区画が設けられている。津山市のこの一帯には吉井川とその支流である香々美川・久米川によって形成された南北に長くひらけた沖積平野がひろがっている。この平野が院庄平野である。院庄館跡は院庄平野のほぼ中心、岡山県津山市神戸字御館443番地に位置する(第2図-1)。まさにこの地は山陰と山陽の分岐点に位置する。すなわち、山陰行あるいは山陽行いずれのルートもこの地で交差するのである。また、水上交通路に目を向けると、古くは院庄村付近では院庄川とも呼ばれた豊富な水量をもつ吉井川は、中世から高瀬船の操船が発達し、瀬戸内海とを結ぶ交通路としても栄えた。院庄館跡はまさしく物資の流通、文化の流通をもたらす陸路・水路の拠点に立地していたのである。

院庄館跡から真南へ約600mのところに院庄構城跡が位置する(第2図-2)。院庄構城跡については築造者も築城年代も定かではない。しかしながら、院庄城をめぐる攻防の記事がみられる14世紀後半頃には、当然築城されているわけである。また、元弘の乱の際、1332年後醍醐天皇が隠岐に配流される時には、院庄館跡が宿所となっている。このことから院庄構城の築城時期は1332年以後14世紀後半にかけての時期と推測することができよう。院庄館跡の南西部は吉井川の氾濫により大きく削り取られている。この氾濫の時期が、1332年から14世紀後半の時期にあたり、館の機能喪失とともに院庄構城へ移るという説も行なわれている。



第1図 院庄館跡位置図



第2図 院庄館跡と関連遺跡分布図(S=1:50,000)

れているが、院庄構城後の院庄館は廃絶することなく守護館としての機能を維持しているようである。応永22(1415)年の『播磨国矢野莊学衆方年貢等算用状』によると、國下用の中に「6月23日、大夫殿作州院庄に御持人夫2人を懸られし時、一宿分を半分(25文)と定む」という記事がみられる。大夫殿とは赤松義則のことであり、赤松義則が院庄に人夫2人を懸られた時の宿代一宿分が25文という意味である。このことから院庄館跡は1415年の時点では機能していたことになるであろう。

院庄構城跡の西方約300mのところには安国寺跡が位置する(第2図-3)。安国寺は周知のように、足利尊氏・直義兄弟が戦没者の冥福を祈るために、あるいは禪宗の地方發展などを目的として各國ごとに1寺を建立させたもので、政治的中心地におかれたものである。美作国の安国寺は現在吉井川の河川敷にある。『作陽誌』によると「東海山安国寺跡」の中に「神戸村の南に在り。遺跡今は(元禄年間)に水に壞さる。この處を安国寺瀬という。」という記事がみられる。また、享保9(1724)年の『神戸村本新田畠畝名寄帳』によると、「あんこく寺1. 下畠9歩 高3升3合 4(畠の等級) 右之内1. 下畠1畝18歩 高1斗7升6合 5」「安国寺 1. 上畠田2畝27歩 高4斗3升5合 1」などの記事がみられ、安国寺の存在を裏付けるものである。

院庄平野の南には東西に旧出雲街道が走り、これに面して院庄構城跡と安国寺跡が位置している。院庄の地はまさに中世美作国の政治的中心的役割を担っていた地域といえよう。



第3図 院庄館跡周辺地形図 ( $S = 1 : 3,000$ )

## II 院庄館跡



第4図 院庄館跡立地状況

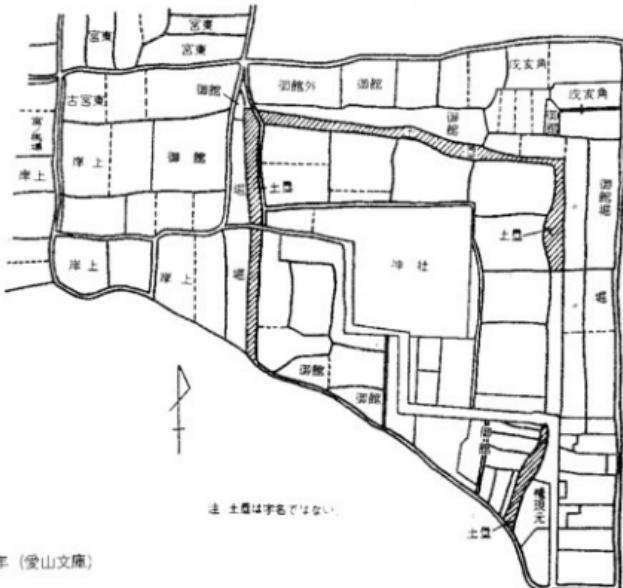
院庄館跡は鎌倉時代から室町時代にかけての美作守護所と推定される遺跡である。美作国は和銅6（713）年、備前国の英多・勝田・苦田・久米・大庭・真島の6郡を割いて設置され、国府は津山市総社の一帯におかれた。政治の中心が総社から院庄の地へ移った記録

としては『作隠誌』に「慶長癸卯（8年）以前、苦田郡院庄州府たり。」とあるのが初見である。次に矢吹正則著『院庄作楽香』には、「文治後、総社に在し国府自ら廃り、鎌倉禦府の派遣せし守護職は、大率此地に居りて州府と称せり。」とある。このように院庄が守護所であるという説は以前から行なわれてきた。院庄の地はもともと後鳥羽上皇の荘園であったところから名付けられたともいわれている。

初代美作国守護職は梶原景時が任命された。元暦元（1184）年から正治2（1200）年までの任期である。次いで2代目は和田義盛が任命され、正治2（1200）年から建保元（1213）年まで務め、その後、北条氏家督、北条氏一門へと引き継がれた。守護は幕府の地方支配を強化する任にあたった。このための守護の館が築かれていたものと考えられる。

院庄館跡は条里に沿って構築されており、その占める面積もほぼ条里の一区画に相当する。このことは館が律令時代の土地制度の伝統の上に作られているということを示している。現在館跡周辺の水田地には館関連地名が多く残っている。享保9（1724）年の『神戸村本新田畠帳名寄帳』には「親方」「親方の内」「親方の外」「ぼり」「親方ぼり」「大門」「館溝」などの地名が記されている。また、明治期の土地台帳原本にも「御館」「堀」「御館堀」「大門」「館溝」などの地名がみられる（第5図）。

昭和48年から49年にかけての発掘調査でも館跡の存在を裏付ける資料が多く発見されている。現在残っている土塁は鎌倉時代以降のもので最初の館の構築よりもやや遅れて築かれたものである。柱穴・井戸なども出土遺物との関連から鎌倉時代のものであるとされている。これらの



大正11年（愛山文庫）

第5図 館関連地名図

ことから考えても「院庄館跡」は鎌倉時代に構築された大規模な守護館跡と考えられる。

後世、元弘の乱（1332年）により後醍醐天皇隱岐配流のみぎりに宿所となったり、館の西南方隣接地に安国寺が建立されたりしたのもこの地に守護所があったからと考えてよい。

足利氏全盛期の美作の守護は赤松氏・山名氏であり、戦国の争乱期の「尼子氏・毛利氏・宇喜田氏・小早川氏の所領となりしも遺跡の区域」は乱されず『作陽誌』に「御館跡方八十間其状尚存す」と記されており、元弘2（1332）年より元禄まで300余年「御行在所跡」として保存されてきた。元禄期以後についても「親方」と称される地名は方八十間の内の中心地「御殿跡と称する所數歩は草生地」（『院莊作樂香』）として開墾されず残されてきた。

貞享5（1688）年、國主森長成の時、長尾隼人勝明は史跡の荒廃を嘆き、東大門跡に碑を建て、後醍醐天皇と児島高徳を顕彰している。また、長尾隼人勝明は、当時の桜が枯れているので、その跡に新桜を植え、旧街道より石碑までの6町余りの直線の参道を開いている。

さらに院庄館跡は一般には、後醍醐天皇と児島高徳の伝承の地としても広く知られているところである。『太平記』によると、元弘の乱により後醍醐天皇が隱岐配流のみぎりに院庄が宿所となったり、備前國の住人児島高徳は後醍醐天皇を引き止めるべく院庄におもむき、ひそかに行在所を窺ったが警備がかたくなかなか天皇に近寄ることができない。そこで夜になるのを待って館に忍び込み、前庭にあった桜の幹を削り「天莫空勾践時非無范蓋」（天勾践ヲ空シウス

ル莫レ、時ニ芒蘿無キニシモ非ズ)の十字の詩を書き残し去った。この詩を読まれた後醍醐天皇は非常に喜ばれたということである。

明治2(1969)年、後醍醐天皇を祭神とし、児島高徳を配祀とした作楽神社が館跡のほぼ中央部に建てられた。神社は東西40間、南北45間を画し、境内と定め、周囲に幅2間半の濠を設け、その外に幅1間の堀を築き、新濠の土を開いて地場とした。その後、大正年間に1度改築された。第2次世界大戦末期の昭和19年には、神社の格を上げるために境内を拡張する必要から神社周辺の掘りを埋め、現在みられる掘りが掘られた。掘りは完全に掘り上がらないまま終戦をむかえ、北東隅は現在も未掘のままの状態で残されている。戦後には神社北東部に池を築くなど神社として整備され、現在に至っている。この間、大正11年3月8日国指定史跡として指定されている。

### III 調査の経過

#### 1. 調査に至る経過

昭和49年陰陽を結ぶ国道179号バイパスが整備され、つづいて昭和50年中国縦貫自動車道吹田～落合間が開通した。院庄にはインターチェンジが置かれたこともあり、バス・自家用車を利用した来訪者が急増した。とくに大型観光バスを利用した来訪者はウイークデーで100台前後、休日には200台前後を越える数となった。しかし、受け入れ体制は全く不十分で地元住民あるいは来訪者から駐車場・便益施設等を含めた環境整備を望む強い要望が出されるようになった。また、交通機関の発達は住宅・商店・工場等の急増をうながした。こうしたなかで、地域住民の関心はもとより、行政的にも大きな課題となり、院庄館跡環境整備を津山市として取り組む必要にせられた。しかし、館跡としての整備に必要な基礎資料は何もなく、基礎資料を得るために確認調査が必要となった。このため、関係行政機関・学識経験者の指導のもとに「史跡院庄館跡保存整備事業委員会」を設け、また、地域住民の協力や理解を得て確認調査を実施することとなった。

確認調査は土壠の残存状態の把握、館構築の時期の究明、館内の遺構の保存状態の把握を主目的として、昭和48年11月21日から昭和49年3月12日まで実施された。この結果は前述のように、考古学的に遺構・遺物によって館存在を証明した。また、遺構の保存状態も極めて良好なことがわかった。この時、館周辺の地名も調査され、「御館」「御館掘」「掘り」などの地名が残っていることが判明した。このことから館跡はさらに外方へ拡がることが予想され、その規模は東西250m、南北300mを推定させることも大きな成果であった。

「史跡院庄館跡保存整備事業委員会」は昭和48年9月18日、10月5日、11月26日、昭和49年

1月31日の計4回開催され、その間、学識経験者からは具体的な造園計画も提案され、検討されたが、第4回目で中間答申が次のとおりなされ、検討は実質的に終了した。

- (1) 館跡を生かした史跡公園整備を行なうこと。
- (2) 館跡に関連する地名のあるところは確認調査を行ない、追加指定し環境整備すること。
- (3) 現館域は館の遺構があるので発掘調査をすることなく勝手に現状を変更しないこと。
- (4) 史跡公園整備をするために、発掘調査を続行すること。
- (5) 公の場を活用し、館跡発掘調査の成果を展示・解説し公開につとめること。

答申結果により、確認調査は継続すべきであったが、他の公共事業に伴なう緊急調査の増加、美作国分寺跡緊急発掘調査などのため、調査できないままになっていた。昭和55年度に入り、ようやく調査の見通しがつき、館関連地名の残っている水田を国・県の補助金を得て調査する運びとなった。調査の主目的は、前回の調査で抜がると考えられていた館域の確認である。

## 2. 調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり、12名からなる保存対策員に調査の指導をうけた。保存対策員会議は昭和55年11月11日、調査の具体的方法について、12月5日、調査結果の検討と今後の取り組みについての課題のもとに2回開催した。調査関係者は次のとおりである。

保存対策員	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター保存工学研究室長	安原 啓介
岡山県文化財保護審議委員		鎌木 義昌
同	七	近藤 義郎
同	七	水内 昌康
岡山県教育委員会文化課長		近藤 信司
同 文化財一係長		中力 昭
同 文化財二係長		河本 清
津山市文化財保護委員長		宮本 祥郎
同 委員		三好 基之
同 上		小山 健三
院庄史跡保存会会长		片山 徳之
津山市連合町内会院庄支部長		日原農夫也

発掘調査主体 津山市教育委員会

同	教育長	福島 栄一
同	教育次長	下山 肇二

事務担当	津山市教育委員会社会教育課長	須江 尚志	
同	文化係長	宇都木俊介	
調査員	同	事務員	行田 稲美
調査補助員	立正大学考古学専攻卒	光延 稲造	

尚、調査にあたり津山市教育委員会社会教育課主事中山俊紀の援助を得た。

発掘調査には、地権者各位をはじめの方々の助言・協力を得ました。記して厚くお礼申し上げます。

神戸北町内会長橋本健治、院庄北町内会長藤原照一、院庄公民館長杉山 薫、津山市文化財保護委員竹久順一、院庄小学校土居 徹

作業員 片岡新一郎、藤本和三夫、藤本元夫、関元きよ子、藤本蓮代、石本清子、日原澄恵  
杉山紀子

### 3. 発掘調査経過

発掘調査は昭和55年11月17日から昭和56年1月8日まで実施した。調査は水稻収穫後の農閑期に実施した。以下、概要是次の通りである。

- 11月11日 第1回院庄館跡保存対策員会議。
- 11月13日 発掘調査器材搬入。
- 11月14日 津山市文化財保護委員会現地視察。
- 11月17日 発掘調査開始。
- 11月18日 T-1 完掘。柱穴3個検出。T-2 完掘。溝確認。
- 11月20日 T-3 完掘。溝確認。
- 11月25日 T-4 完掘。
- 11月27日 T-5 完掘。柱穴1個検出。
- 12月4日 T-6 完掘。柱穴3個検出。
- 12月5日 第2回院庄館跡保存対策員会議。
- 12月11日 T-7 完掘。T-1, T-2, T-3 実測。
- 12月16日 T-4, T-5 実測。
- 12月17日 T-6, T-7 実測。
- 1月6日 T-8 完掘。溝確認。
- 1月7日 T-1～T-7 埋め戻し完了。
- 1月8日 器材片付け、器材搬出。T-8 実測。水準点の移動。

## IV 調査の記録

調査は館域を確認する目的で、館関連地名の残っている水田をトレンチ調査した。南側は吉井川の氾濫で削り取られていると考えられるので、東側、北側、西側にトレンチを設定した。トレンチは幅2mで、8ヶ所設定した。トレンチ番号は調査順に付したものである。

### 基本的層序

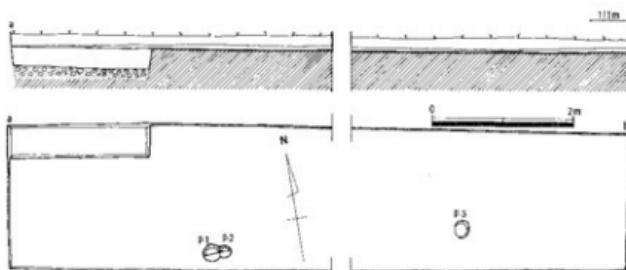
調査により確認された層序は、上から灰色水田層、黄褐色粘質土層(水田の床土)、黒色上層、礫層となる。遺物は灰色水田層、黄褐色粘質土層に包含される。黒色土層には全く包含されない。造構は全て黒色上層上面で検出される。これらのことから、黒色上層は館期の生活面と考えられる。まとめると、次の通りである。

1層……灰色水田層。遺物を包含する。層厚約20cm。

2層……黄褐色粘質土層。水田の床土。遺物を包含する。層厚5~10cm。

3層……黒色上。無遺物層。上面は館期生活面。層厚約20cm。

T-1 (第6図)



第6図 T-1 平面図及び断面図

「掘り」の地名の残っている水田である。柱穴が3個検出された。P-2より上師質土器2点、P-3より勝間田焼杯破片が出土した。P

—1は径25cm、深さ22cm、P-2は径16cm、深さ23cm、P-3は長径25cm、短径20cm、深さ33cmを測る。

T-2 (第7図)

「大門」の地名の残っている水田である。南北に走る幅約2.5m、深さ55cmの溝が検出された。溝は黒色土上面から掘り込まれ、底面は礫層に達している。溝内からは備前焼、勝間田焼土師質土器のいずれも小破片が出土した。溝の西側立ち上がりの肩は後の新しい溝(g)によって切られている。土層断面は次の通りである。

a. 暗灰色粘質土層(砂まじり)

b. 暗灰色粘質土層

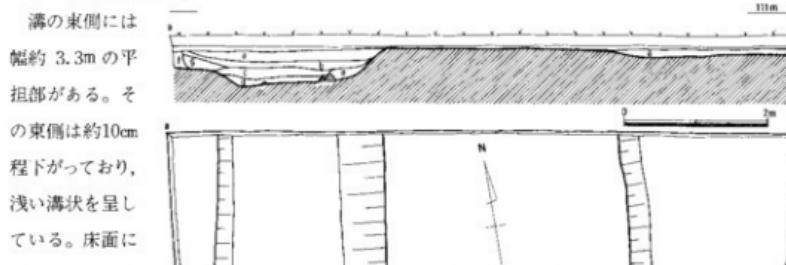
c. 暗灰色粘質土層（黒色土ブロックを含む）

d. 淡灰色粘質土層

e. 黄黒褐色土層

f. 黒色粘質土層

g. 淡灰色粘質土層



第7図 T-2平面図及び断面図

### T-3 (第8図)

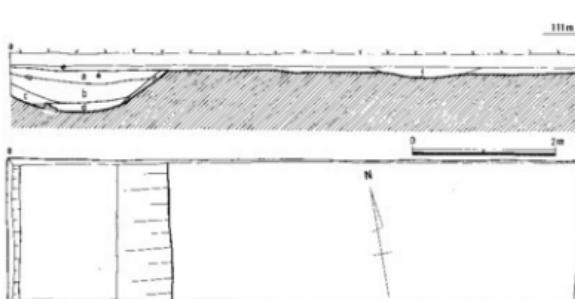
「大門」の地名の  
残っている水田であ  
る。T-2で確認さ  
れた溝がどういう状  
態で北へ延びている  
かをきぐるために入  
れたトレーンチである。  
T-2の溝が北へ延  
びているのは確認さ

れたが、溝の形状がやや異なっている。T-2の溝の断面形は逆低台形を呈しているのに対し、  
T-3の溝は半円形を呈す。深さもT-3の方がやや深い。溝内からは土師質土器の小破片が  
若干出土した。T-2で確認された道路状造構は把握できなかった。黒色土上面には砂層が約  
1cmの厚さで全面に堆積していた。河川の氾濫によるものと考えられる。土層は、

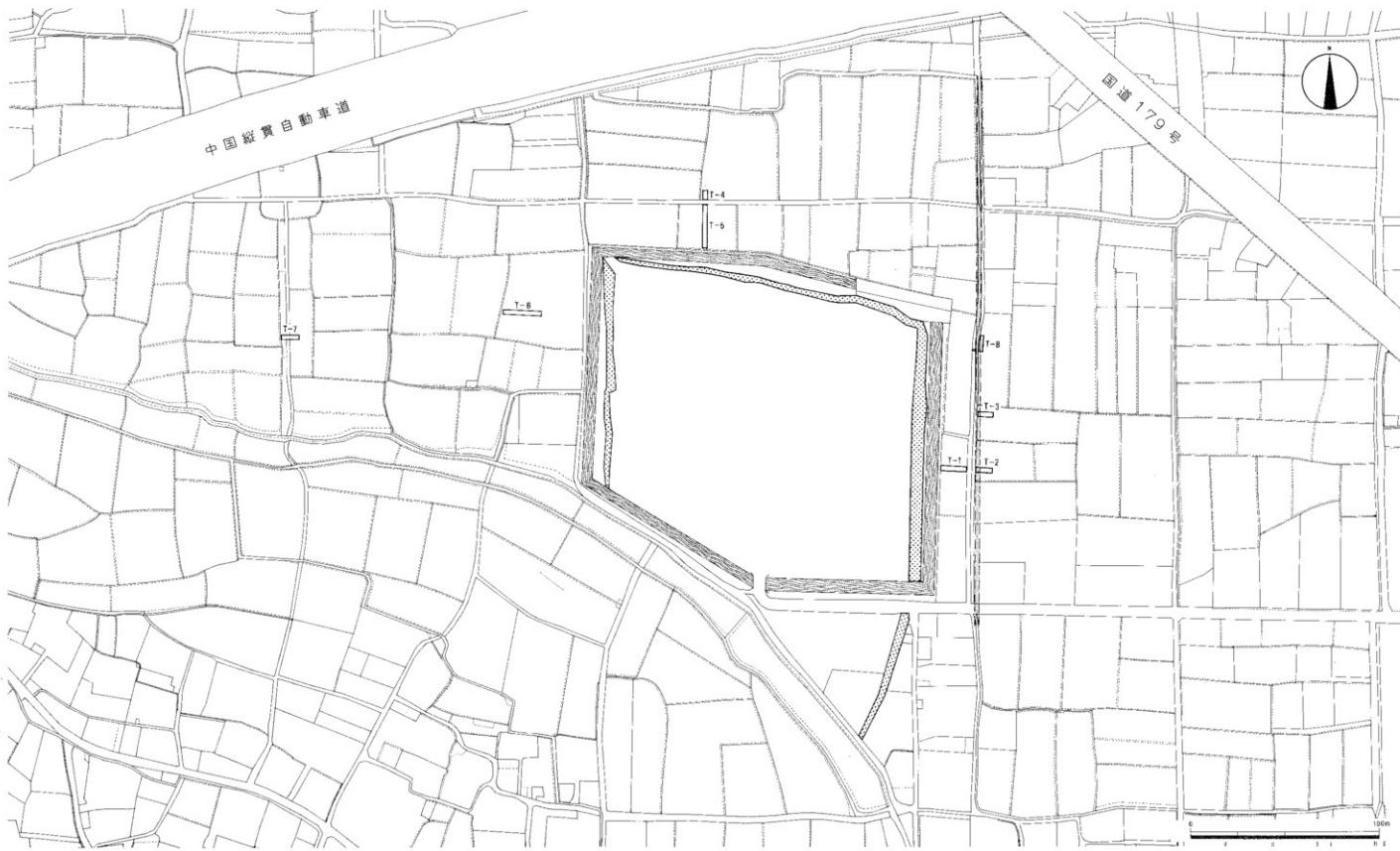
a. 暗灰色粘質土層（紗まじり）

b. 暗灰色粘質土層

c. 暗灰色砂疊層

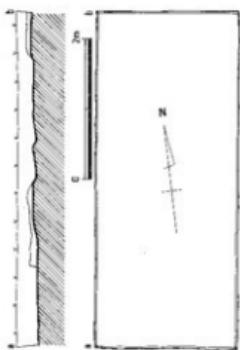


第8図 T-3平面図及び断面図

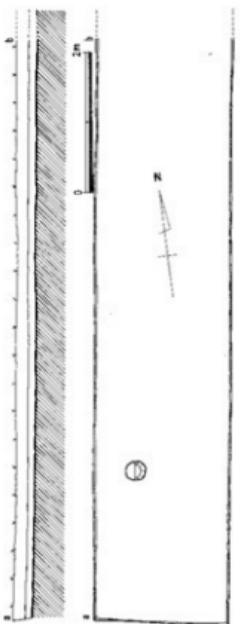


第9図 トレンチ配置図と地形図

- d. 暗灰色粘質土層  
e. 暗灰色砂礫層  
f. 灰色粘質土層（砂まじり）である。



第10図 T-4 平面図及び断面図



第11図 T-5 南半分平面図及び断面図

#### T-4 (第10図)

「五反田」の地名のつく水田である。遺構は何も検出されなかった。遺物は勝間田焼、土師質土器片が若干出土しただけである。

#### T-5 (第11図)

「御館」の地名の残っている水田である。遺構としては柱穴1個が検出されたのみである。柱穴は径約30cm、深さ約40cmを測る。遺物としては備前焼すり鉢、土鍋など比較的大きい破片が出土した。T-2、T-3で確認された溝がT-4とT-5の位置へくるという想定のもとにトレンチを設定したが、残念ながら溝は確認されなかつた。恐らく、T-4の水田の北側にくるものであろうと考えられる。

#### T-6 (第12図)

西側で唯一「御館」の地名の残っている水田である。遺構は柱穴3個、溝3本である。P-1は径30×25cm、深さ12cm、P-2は径25×20cm、深さ8cm、P-3は径35×25cm、深さ38cmを測る。いずれも遺物は出土しなかつた。浅い溝が南北に3本検出された。埋土は灰黒褐色のしまりのない土であり、遺物は包含されない。遺物は備前焼、土師質土器、勝間田焼などが、黑色土上面から若干出土した。T-2、T-3で確認された溝が西側ではこの位置にくる想定でトレンチを設定したが、北と同様、溝は確認されなかつた。

#### T-7 (第13図)

「古宮馬場」の地名のつく水田である。このトレンチは館跡中心部からかなり離れた位置にあるが、耕作時に土器がたくさん出土したという地元の人の話、あるいは、ほぼ磁化にそって南北に細長く続く水田であることから、溝の可能性も考えられるということで設定した。

遺構としてはT-6同様の深い溝が5本検出された。埋土も同様、しまりのない灰黒褐色土である。深さは深いもので約10cmである。遺物は、調査したトレンチの中で最も多く、偏前焼、勝間田焼など大きな破片が出土した。

#### T-8 (第14図)

「老町田」の地名のつく水田である。本トレンチは農道、水路の改修計画が起り、事業実施に先立ち事前に調査したものである。

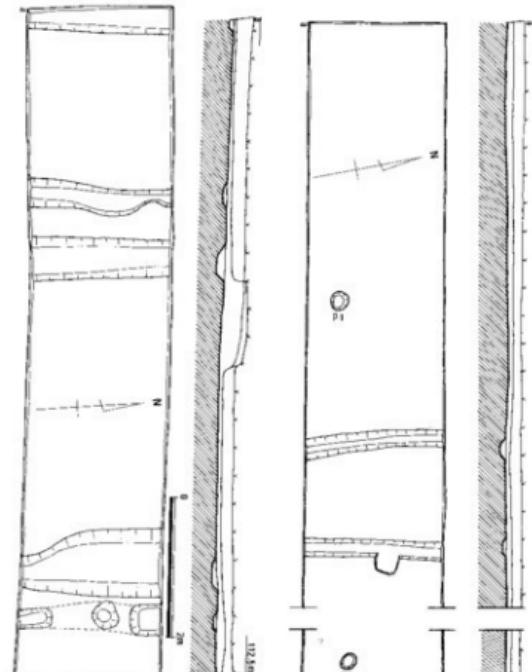
T-2, T-3で確認された南北に走る溝を追及するため設定した。溝中心部は現在の農業用水路と重複しており、わずかに溝の東側の肩を残すだけであった。溝埋土は

- 暗黄褐色粘質土層
- 青灰色粘質土層

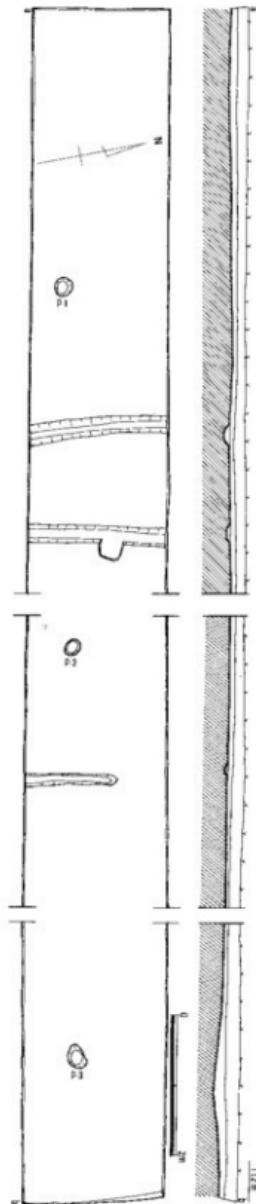
である。遺物は土師質土器片の小破片が数点出土した。

農業用水路をはさんで西側に農道がある。検出された溝を館を画する溝と考えるならば当然内側に土壘がくる。この土壘の残存したものが農道である可能性も考えられるという想定で農道を切断した。しかし、黒色土上面には水田の床土である黄褐色粘質土が堆積しており、他の水田と同様の堆積状況を示していることから、この位置に土壘はないことが判明した。

以上、調査の概要を述べたが、館に関連すると考えられる遺構としては、T-2, T-3, T-8で検出された幅約2.5m、深さ約60cmの南北に走る溝、T-1, T-5, T-6で



第13図 T-7平面図及び断面図



第12図 T-6平面図及び断面図

検出された柱穴 6 個である。遺構は非常に保存状態がよく、全て黒色土上面より検出された。黒色土は院庄館跡周辺に広く分布しており、大きな擾乱はほとんど受けていない。

遺物は量的に非常に少なく、遺構に伴なって出土したものも若干にすぎない。

## V 遺 物

遺物は 1 点の鉄製品を除き、他は全て土器類である。土器は、土鍋、備前焼、勝間田焼、土師質土器、白磁に分類される。他に茶わん、皿など現代のものが若干含まれる。

### 鉄製品（第15図）

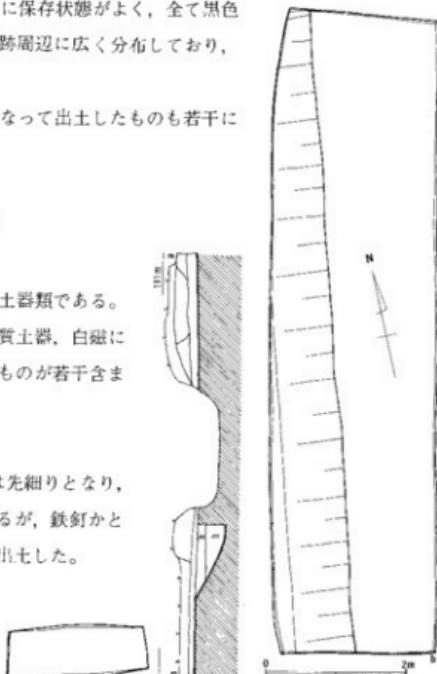
長さ 5.6cm、太さ約 1 cm を測る。下半は先細りとなり、やや曲っている。腐食がかなり進んでいるが、鉄釘かと考えられる。T-5 黄褐色粘質土層より出土した。

### 土鍋（第16図 1, 2）

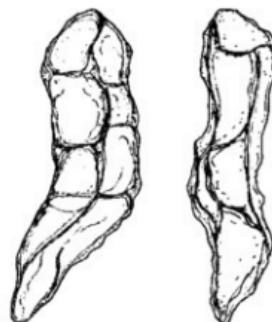
どちらも鋸のつくものであり、鋸の下は煤が多量に付着している。瓦質である。どちらも遺構に伴なはず出土した。

### 備前焼（第16図 3～6）

全てすり鉢である。3～5 は口縁部、6 は底部破片である。3 は内面暗褐色、外面は濃青灰色を呈す。口縁端部は下方に張り出している。胎土には微砂粒を多量に含む。T-5 黄褐色粘質土層より出土した。4 は暗灰褐色を呈す。胎土には大粒の砂粒を含む。T-5 黄褐色粘質土層より出土した。5 は明褐色を呈す。胎土には 1～3 mm 大の砂粒を多量に含む。口縁部内面には突帯がめぐる。片口のつく器形である。外面には 2 本の凹線が施されている。T-7 灰色水田層より出土した。6 は赤褐色を呈す。内面には縱方向の凹線が施されるが、使用による摩滅で凹みが失なわれている部分がある。内面は全体的につるつるである。胎土



第14図 T-8 平面図及び断面図



第15図 T-5 出土鉄製品実測図 (S=1:1)

は砂質に富む。T-7  
黄褐色粘質土層より出土した。

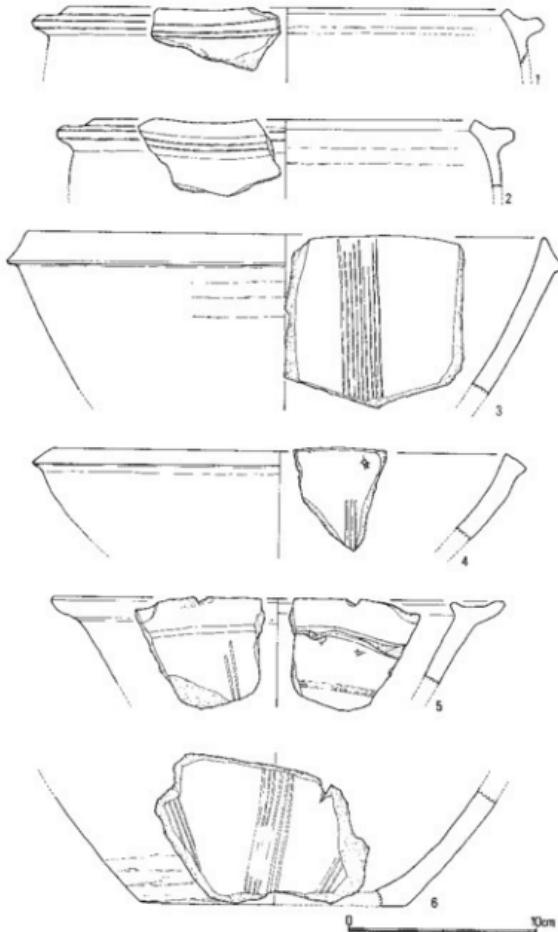
勝間田焼（第17図  
1～13）

1～4は杯口縁部、  
5～8は底部破片である。口縁部には重ね焼  
の痕跡を残す濃青灰色  
の帯がめぐる。4は1  
～3に比べやや深い器  
形になっている。5～  
8は回転糸切り痕をもつ底部である。8は高  
台のつくものであるが、  
糸切り痕を残したまま  
高台を張り付けている。  
勝間田焼で高台のつく  
器形のものは全てこの  
手法を用いている。9  
は小皿口縁部破片であ  
る。10・11は菱口縁部、  
12は底部破片である。  
12は焼成良好で堅緻で  
あるが、10・11はやや  
やわらかい感じをうけ  
る。色調はいずれも青

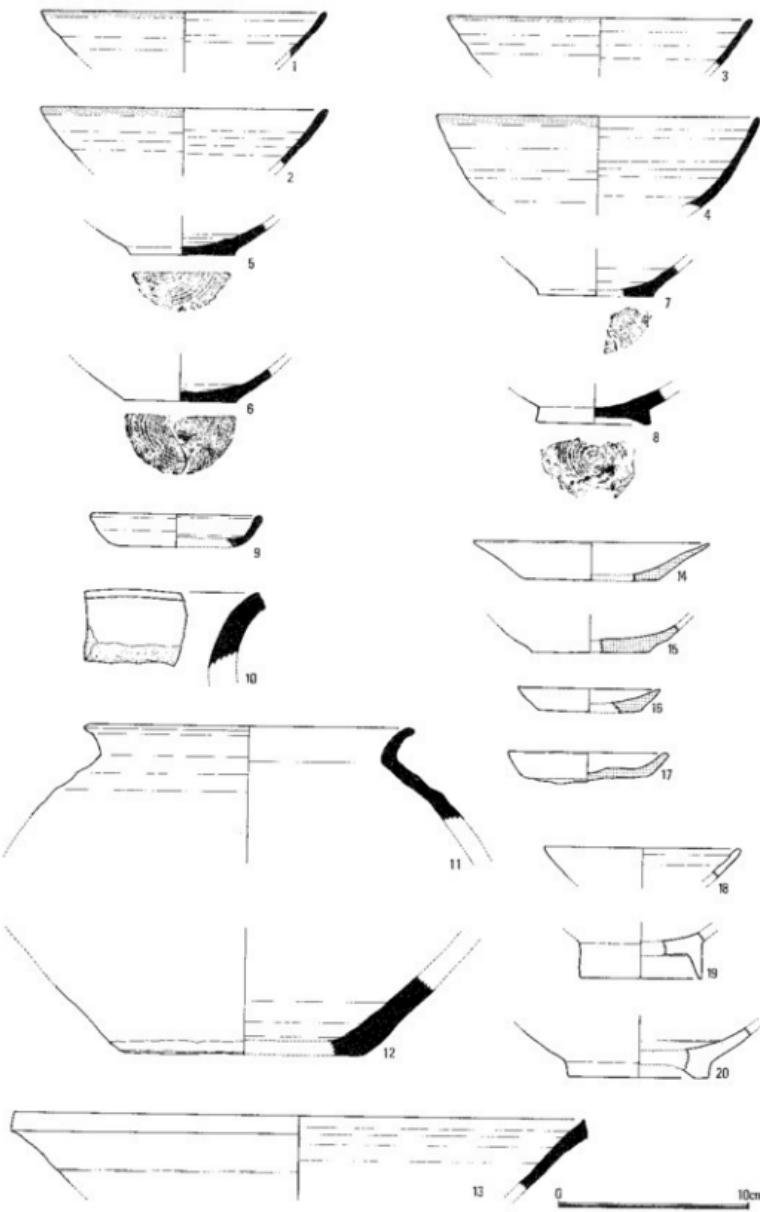
灰色を呈す。13はこね鉢と考えられる。青灰色を呈し砂質に富む。いずれも遺構に伴って出土  
したものはなく、灰色水田層あるいは黄褐色粘質土層より出土した。

土師質土器（第17図 14～17）

14・15は杯、16・17は小皿である。16は灯明皿に使用されたものと考えられる。15は保存状  
態が悪く、底部の手法は不明であるが、2本の板口が残っている。14・16・17はいずれも底部  
回転ヘラ切り手法を用いている。16はT-2溝埋土より出土したものである。



第16図 出土土器実測図(1) (S=1:3)



第17図 出土土器実測図(2) ( $S = 1 : 3$ )

### 白磁（第17図 18~20）

18は皿口縁部、19・20は高台付楕の底部破片である。色調は18・20が灰白色、19が黄白色を呈す。胎土はいずれも精緻である。20の内面には凹線がめぐる。18・20はT-5 黄褐色粘質土層、19はT-3 灰色水田層より出土した。

以上、土鍋、備前焼、勝間田焼、土師質土器、白磁の各造物は多少の時期差はある、同一時期を共有するものと考えられる。

## VI 結 語

今回の調査は調査面積が狭いためか、遺構も遺物も非常に少なく多くを語れるものではない。従って、院庄館跡の問題点を整理することによりまとめとしたい。

院庄館跡が美作国守護所と考えられるようになったのは『作陽誌』の「慶長癸卯以前、苦西郡院庄州府たり」という記事以後であり、現在では定説となった感がある。しかし、その内容については、存続期間、規模、構造などいまだ不明な点が多い。これらの点について若干の考察を行なうことにする。

まず存続期間の問題である。院庄館跡すなわち美作国守護所の開始は、梶原景時が初代美作国守護職に任命された正暦元（1184）年とみて大きな誤まりはあるまい。つづいて和田義盛、北条氏家督、北条氏一門へと引き継がれるが、記録としては延慶2（1309）年、北条氏一門が守護職についた記事を最後にと見える。その後、元弘の乱の時、後醍醐天皇が隠岐配流となりこの地が宿所となった記事が『太平記』にみられる。元弘2（1332）年のことである。この頃より以降、院庄構城が築城されることになるが、院庄館は守護所としての機能を喪失することなく存続しているようである。『播磨国矢野莊学衆方年貢等算用状』によると、赤松義則が院庄に人夫2人を懸られた時の宿代が25文であるという記事がみられる。応永22（1415）年のことである。これ以後については現在のところ不明であるが、少なくとも応永22（1415）年までは何んらかの形で機能していたことができよう。

次に、規模・構造についてみると、今回の調査のT-2、T-3、T-8で検出された幅約2.5m、深さ約60cmの南北溝が問題となってくる。一般にみられる守護大名・戦国大名の居館の掘りに比べ、検出された溝は非常に小規模である。ちなみに『森家先代実録』の中の院庄構城を例にとることにする。「苦西郡院庄村古城の跡平城にて本丸50間四方東掘南北へ長き38間横幅9間西掘南北68間掘幅13間南掘長さ54間幅12間北掘長さ38間幅8間」という記事がみられ、調査で検出した溝の数倍の規模である。このことは、守護所と守護大名の居館の違いということができよう。特に、美作国においては中世の始まりから14世紀後半頃までは大きな争乱もなく平穏な時期であり、防禦的性格をもつ大規模な掘り、土塁は築く必要がなかったと考えられ

る。調査で検出した溝は館の東側しか確認できなかったが、おそらく館の周囲を取り囲むものと考えられる。これはほぼ条里の一画にも相当するものもある。溝内からは若干の土器片が出土したのみであるが、この土器からみると館存続期の範ちゅうに入るものである。現存する土塁は往時のものを踏襲したものであり、土塁に囲まれた内部には井戸跡、掘立柱建物の柱穴が確認されている。このことから、館の中心主体はあくまでも土塁の内部であるということができよう。また、館跡の東の水田地には「大門」、南には「小門」の地名がみられ、東に主要な入口があったことが推定される。

#### 引用・参考文献

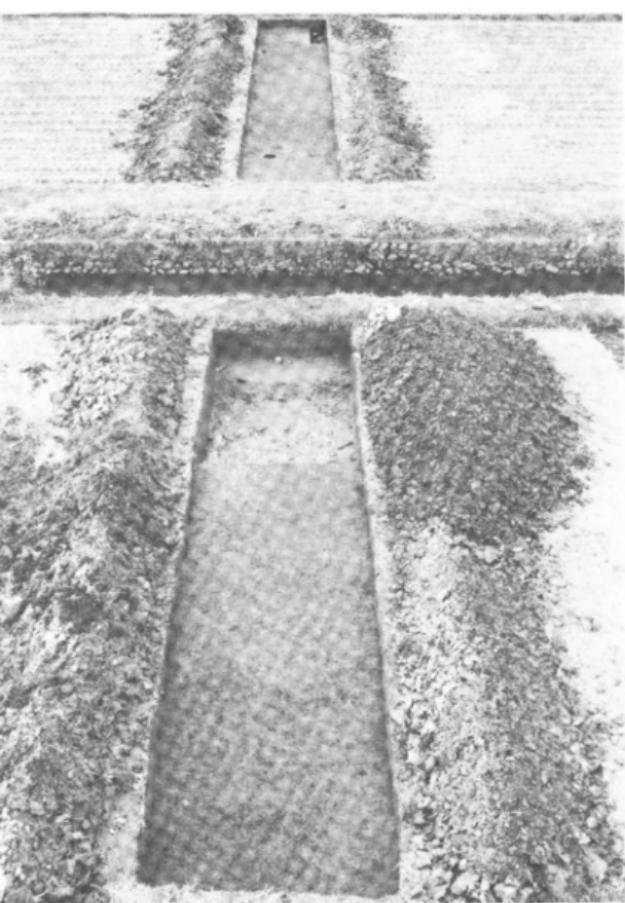
- 『享保 9 年神戸村本新田畠歎名寄帳』（愛山文庫）  
矢吹正則 『院莊作樂香』 1905  
『新訂作陽誌』 1912  
『教王護國寺文書卷三』 1962  
津山市教育委員会 『津山郷上館近世基礎資料 1 森家先代実録』 1968  
松岡三樹彦 『津山市史第 3 卷』 1973  
池畠耕一、伊藤 晃、井上 弘、枝川 隆、岡田 博、河本 清、高橋 譲、橋本惣司、柳瀬昭彦「美作国府」 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書 6』 1973  
河本 清 『史跡院庄跡発掘調査報告書』 1974  
三好基之 『津山市史第 2 卷』 1977  
高畠知功、二宮治夫 「二宮遺跡」 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書 28』 1978  
院庄公民館 『院庄誌』 1979  
濱 哲夫、安川豊史、行田裕美 「美作国分寺跡発掘調査報告」 1980





院庄館跡航空写真

図版 2

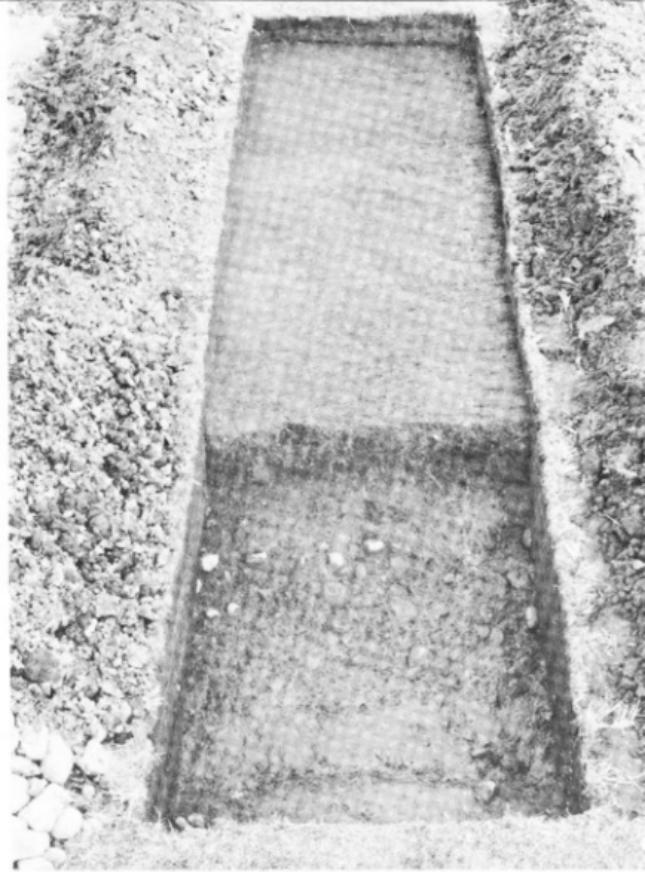


T-1, T-2 (東から)

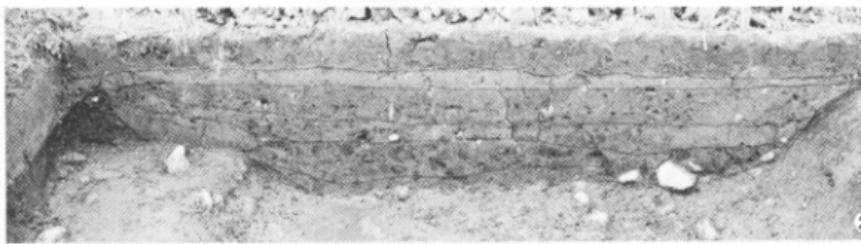


T-2溝 (南から)

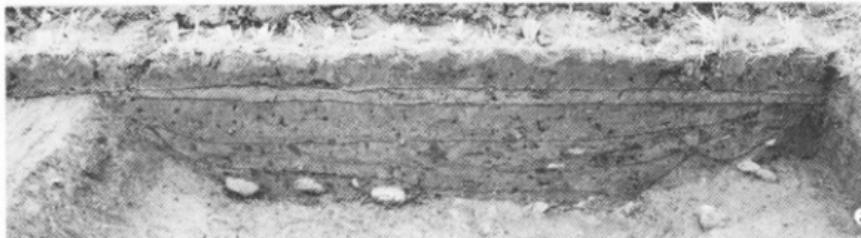
図版 3



T-2溝（西から）

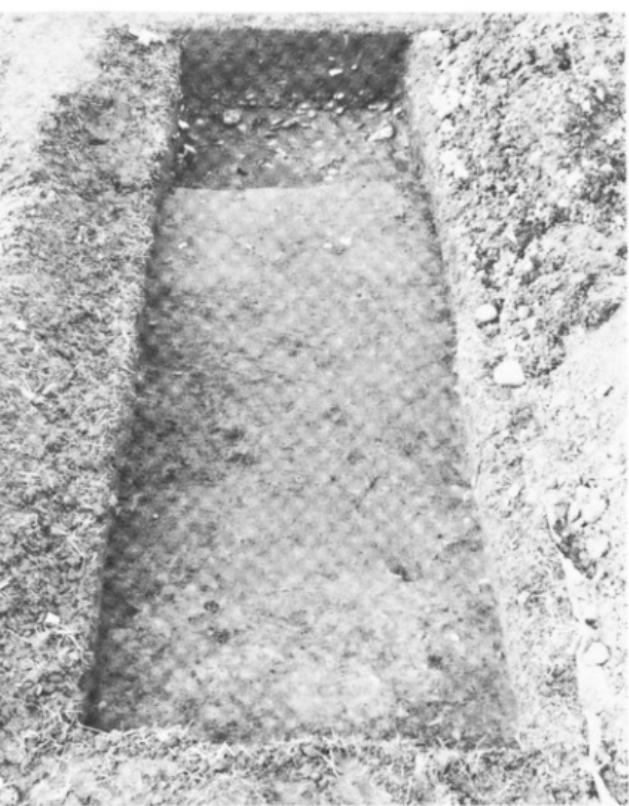


T-2溝断面（南から）

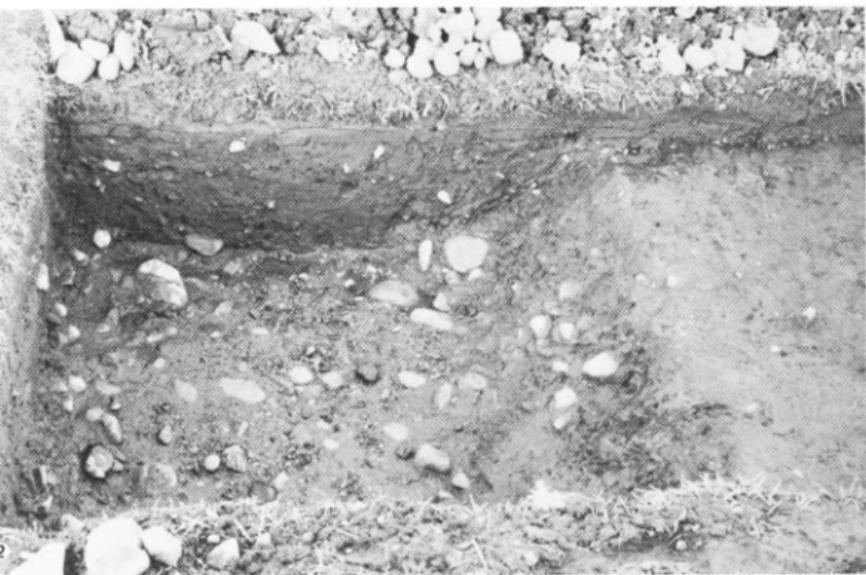


T-2溝断面（北から）

図版 4



T-3 (東から)



T-3溝 (南から)



T-4, T-5 (北から)



T-5 柱穴 (東から)

図版 6



1

T-6 (西から)



2

T-7 (西から)

図版 7

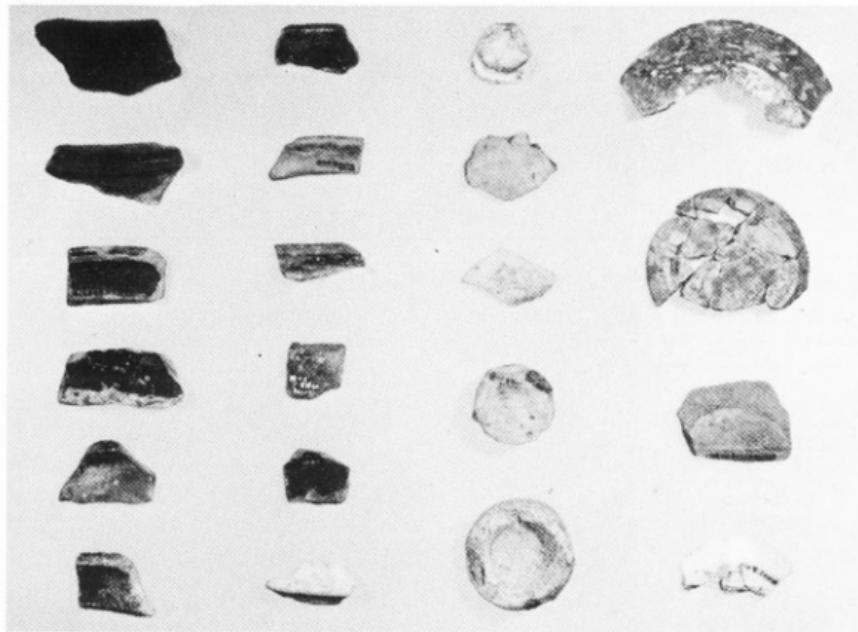


T-8 (南から)

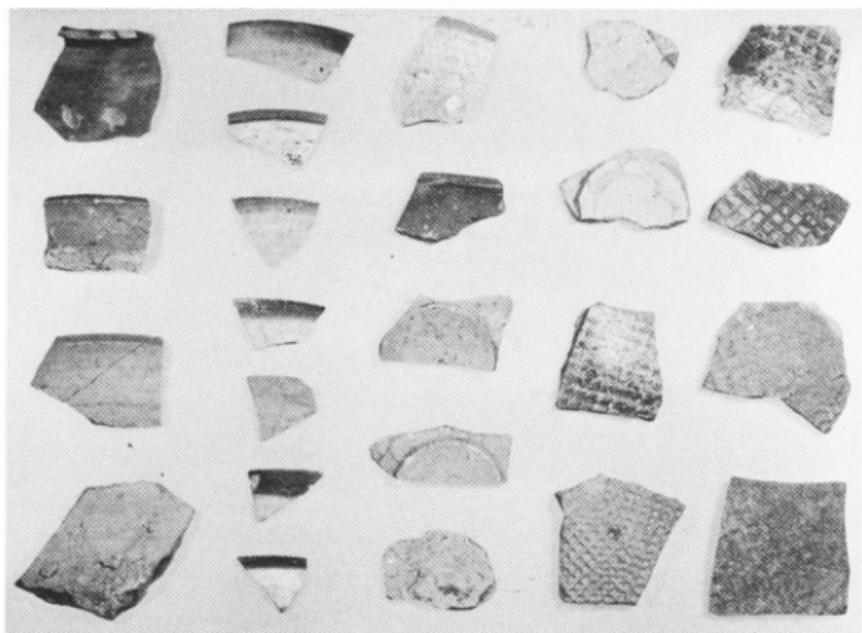


T-8 溝断面 (北から)

図版 8

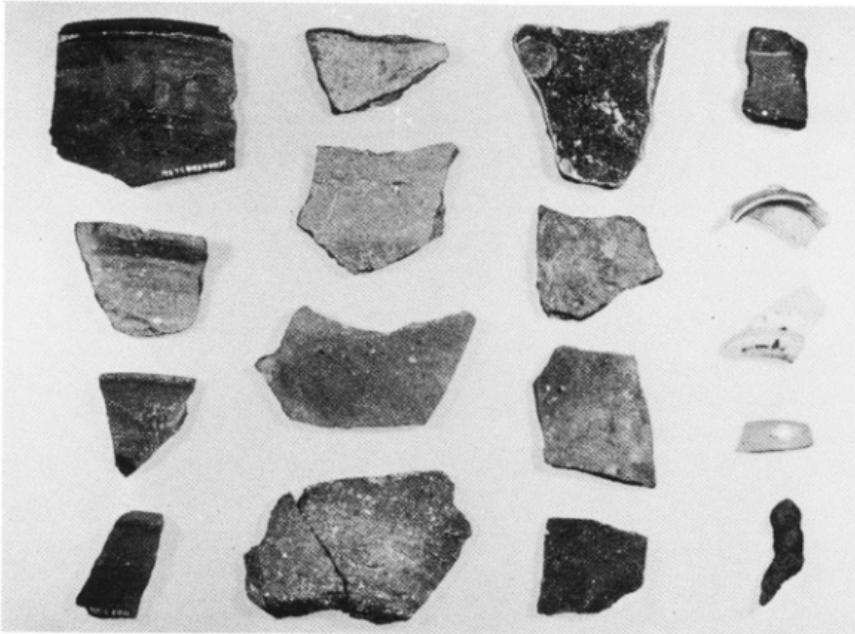


1. 土鍋、土師質土器

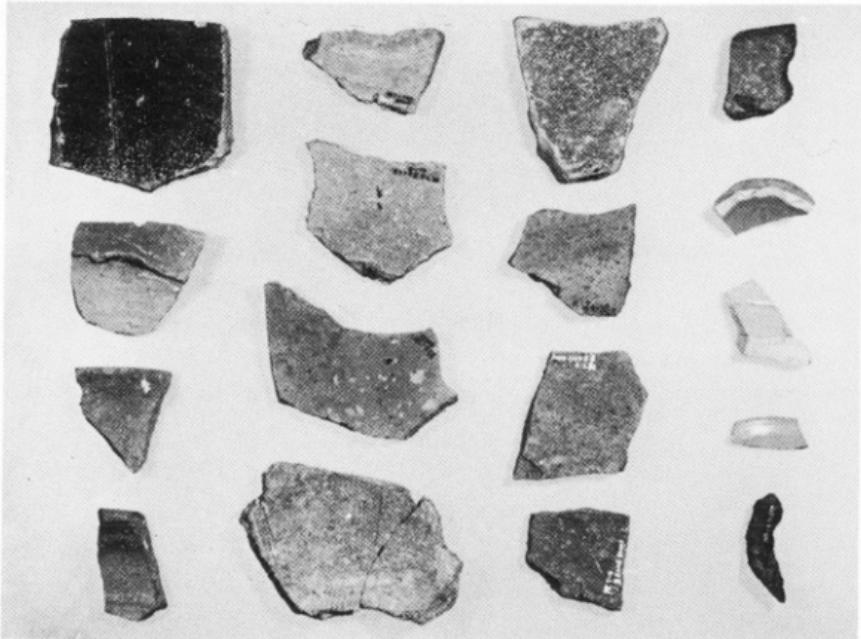


2. 窯間田焼

図版 9



1. 備前焼、白磁、(外面) 鉄製品 ( $S = 1 : 3$ )



2. 備前焼、白磁、(内面) 鉄製品 ( $S = 1 : 3$ )



史 跡 院 庄 館 跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第7集

1981年3月31日

発行 津山市教育委員会  
印刷 作州日報印刷